

招待席

大手 拓次

おおて たくじ 詩人 1887.12.3 - 1934.4.18 群馬県碓氷郡に生まれる。明治四十五年十二月「朱楽」に詩作を発表以後おおかた北原白秋主宰誌に拠り、室生犀星、萩原朔太郎とともに「白秋麾下の三羽鴉」と謳われながら、画家逸見亨らと数冊の詩画集を残しただけで、詩壇とはほぼ没交渉のうちに死去。主要詩集の『藍色の墓』（昭和十一年・1936）他は没後に刊行された。掲載作はその『藍色の墓』より抄出。

陶器の鴉 他

陶器の鴉

陶器製のあをい鴉。

なめらかな母韻をつつんでおそひくるあをがらす、
うまれたままの暖かさでお前はよろよろする。
嘴の大きい、眼のおほきい、わるだくみのありさうな青鴉、
この日和のしづかさを食べる。

槍の野辺

うす紅い昼の衣裳をきて、お前といふ異国の夢がしとやかにわたしの胸をめぐる。

執拗な陰気な顔をしてる愚かな乳母(うば)は
うつとりと見惚れて、くやしいけれど言葉も出ない。
古い香木(かうぼく)のもえる煙のやうにたちのぼる
この紛乱した人間の隠遁性と何物をも恐れない暴逆な復讐心とが、
温和な春の日の箱車(はこぐるま)のなかに狎(な)れ親しんで
ちやうど麝香猫(ぢやかうねこ)と褐色の栗鼠(りす)とのやうにいがみあふ。
をりをりは麗しくきらめく白い歯の争鬪に倦怠の世は旋風の壁模様に眺め入

る。

憂はわたしを護る

憂はわたしをまもる。

のびやかに此心がをどつてゆくときでも、
また限りない瞑想の朽廃へおちいるときでも、
きつと わたしの憂はわたしの弱い身体(からだ)を中庸の微韻のうちに保つ。
ああ お前よ、鳩の毛竝(けなみ)のやうにやさしくふるへる憂よ、
さあ お前の好きな五月がきた。
たんぽぽの実のしろくはじけてとぶ五月がきた。
お前は この光のなかに悲しげに浴(ゆあ)みして
世界のすべてを包む恋を探せ。

むらがる手

空はかたちもなくくもり、
ことわりもないわたしのあたまのうへに、
錨(いかり)をおろすやうにあまたの手がむらがりおりる。
街のなかを花とふりそそぐ亡霊のやうに
ひとしづくの胚珠(はいしゆ)をやしなひそだてて、
ほのかなる小径(こみち)の香(か)をさがし、
もつれもつれる手の愛にわたしのあたまは野火のやうにもえたつ。
しなやかに、しろくすずしく身ふるひをする手のむれは、
今わたしのあたまのなかの王座をしめて相姦(さうかん)する。

つめたい春の憂鬱

にほひ袋をかくしてあるやうな春の憂鬱よ、
なぜそんなに わたしのせなかをたたくのか、
うすむらさきのヒヤシンスのなかにひそむ憂鬱よ、
なぜそんなに わたしの胸をかきむしめるのか、
ああ、あの好きなともだちはわたしにそむかうとしてゐるではないか、

たんぽぽの穂のやうにみだれてくる春の憂鬱よ、
象牙のやうな手でしなをつくるやはらかな春の憂鬱よ、
わたしはくびをかしげて、おまへのするままにまかせてゐる。
つめたい春の憂鬱よ、
なめらかに芽生えのうへをそよいでは消えてゆく
かなしいかなしいおとづれ。

林檎料理

手にとつてみれば
ゆめのやうにきえうせる淡雪りんご、
ネルのきものにつつまれた女のはだのやうに
ふうはりともりあがる淡雪りんご、
舌のとけるやうにあまくねばねばとして
嫉妬のたのしい心持にも似た泡雪りんご、
まつしろい皿のうへに、
うつくしくもられて泡をふき、
香水のしみこんだ銀のフォークのささるのを待つてゐる。
とびらをたたく風のおとのしめやかな晩、
さみしい秋の
林檎料理のなつかしさよ。

まるい鳥

をんなはまるい線を糸がいて
みどりのふえをならし、
をんなはまるい線をひいて
とりのはねをとばせる。
をんなはまるい線をふるはせて
あまいにがさをふりこぼす。
をんなは鳥だ、
をんなはまるい鳥だ。
だまつてゐながらも、
しじゅうなきご糸をにほはせる。

洋装した十六の娘

そのやはらかなまるい肩は、
まだあをい水蜜桃のやうに媚(こび)の芽をふかないけれど、
すこしあせばんだうぶ毛がしろい肌にぴちやつとくつついてゐるやうすは、
なんだか、かんで食べたいやうな不思議なあまい食欲をそそる。

十六歳の少年の顔 思ひ出の自画像

うすあをいかげにつつまれたおまへのかほには
五月(ごぐわつ)のほととぎすがないてゐます。
うすあをいびろうどのやうなおまへのかほには
月のにほひがひたひたとしてゐます。
ああ みればみるほど薄月(うすづき)のやうな少年よ、
しろい野芥子(のげし)のやうにはにかんでばかりゐる少年よ、
そつと指でさはられても真赤になるおまへのかほ、
ほそい眉、
きれのながい眼(め)のあかるさ、
ふつくらとしたしろい頬の花、
水草(みづくさ)のやうなやはらかいくちびる、
はづかしさと夢とひかりとでしなしなとふるへてゐるおまへのかほ。

雪のある国へ帰るお前は

風のやうにおまへはわたしをとほりすぎた。
枝にからまる風のやうに、
葉のなかに真夜中をねむる風のやうに、
みしらぬおまへがわたしの心のなかを風のやうにとほりすぎた。
四月だといふのにまだ雪の深い北国(ほくこく)へかへるおまへは、
どんなにさむざむとしたよそほひをしてゆくだらう。
みしらぬお前がいつとはなしにわたしの心のうへにちらした花びらは、
きえるかもしれない、きえるかもしれない。

けれども、おまへのいたいけな心づくしは、
とほい鐘のねのやうにいつまでもわたしをなくさめてくれるだらう。

昭和十一年十二月刊「藍色の暮」より